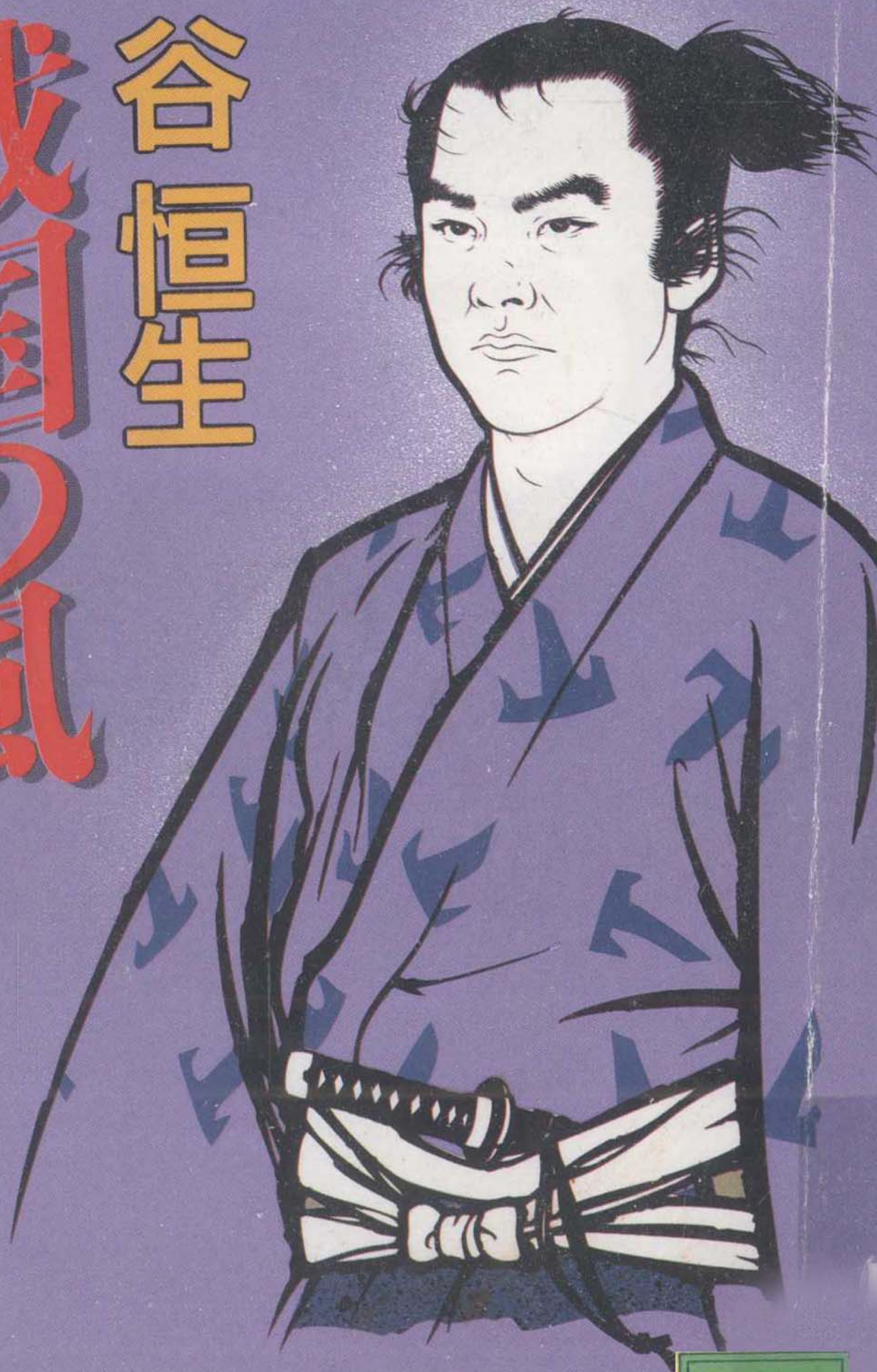


戦国の風

谷恒生



社文庫
談講
講談社
文庫

せんごく かぜ
戦国の風

たに こうせい
谷 恒生

© Kosei Tani 1992



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1992年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-185235-3



講談社文庫

戦国の風

谷 恒生

講談社

目次

第一章 黄金の都市 七

第二章 虚々実々 八

第三章 南海へ 一五

第四章 異国 二九

第五章 興廃 三四

解説 権田萬治 四〇六

戦国の風

第一章 黄金の都市

1

天正二年五月。

紀伊水道から友ヶ島水道を奔^{はし}って大坂湾沿いにうねる潮流の流れは強い。

昨夜の暴風で、海の色は黄濁^{きだくいろ}色に濁^{にご}っていた。洪水の濁流のような海が盛りあがって沿岸に押し寄せていく。

波頭^{なづ}が殺伐^{さつぱつ}と飛沫^{しぶき}を散らして打ちかかる海岸から、土塁^{どるい}を盛った堰^{せき}を距^{へだ}てて、煉瓦^{れんが}造りの倉庫が建ち並んでいる。おびただしい数であった。

空をおおう層雲越しに洩れるうすい陽が、倉庫の煉瓦壁に濃淡のまだら模様をえがいている。倉庫はそれぞれ、嚴重な監視態勢が敷かれている。警備の者が二名、四六時中、火縄銃をたずさえて倉庫の前に立ち、まわりには柵が張りめぐらされてあった。倉庫の頑丈な鋼鉄の扉には大きな錠前がかかっている。

海岸沿いに建ち並ぶおびただしい倉庫群は、泉州堺の納屋衆の持物である。これらの倉庫の内部には、想像を絶するほどの富がつまっているのだった。

当時、堺は黄金期の絶頂を迎えていた。戦乱のつづく日本六十余州を尻目に、この国際自由貿易都市は圧倒的な経済力を誇り、あたかも貪婪な魔物のように日本中の富を吸収しつづけていく。

言うなれば、現在の香港やシンガポールのような大都会であろう。

堺港から海へ張りだした数十の棧橋には大小さまざまな商船がひしめき合い、禪一枚の船荷人足たちが汗を全身にしたたらせて、こもをかぶった積荷を休みなく船艙に運びこんでいく。

五月は商船団の出帆の季節であった。北東の季節風が太平洋からアジア大陸に吹き込み、商船団はこの季節風と黒潮に乗って、中国大陆、ジャワ、シヤム、マラッカ、天竺へと航海していくのである。

この時代の航海は、それ自体が命がけの冒険であった。風をたよりに大海原をおしわたっていく前途には、熱帯低気圧の巻き起こす大暴風や無風海域が待ちかまえ、大陸沿岸やマラッカ海峡には海賊どもが跳梁している。

百隻の船団で無事に目的地までたどりつけるのは、おそらく、半数以下であろう。それだけに、船の運航を担う船長を初めとする航海要員はきわめて貴重な存在であった。

気象学、天文学に精通し、羅針盤と四分儀を自在に使いこなし、航海術に熟達し、なにより、あふれる壮気といかなる状況にも臆さない不屈の肝魂を必要とした。

そうした優秀な船長^{ふなおさ}たちは村上水軍、伊豆水軍、熊野水軍などの出身であり、代々、幼少の頃より航海術、天文学を学び、海洋に関するあらゆる知識を身につけてきた人物であった。人格に秀れ、沈着、冷静をむねとし、しかも、気魄豪強にして武芸に優れている人物であるからこそ、堺の大実業家たちは、現在の時価にして数百億円^{ひゃくえん}の財貨を積んだ船を託すことができるのである。

数千人の船荷人足等でごったがえす港^{かひ}界隈^{かい}は喧噪^{けんそう}と活気にあふれ、人足たちの汗の臭いにむせかえっている。

港へつづく通りの両側には船具屋、日用雑貨の店、刀剣屋などが軒を連ね、一膳飯屋や安旅籠^{あんりよう}がいたるところにあった。

いずれの時代においても、港界隈には陰謀と阿片と、異国の臭いと売春と人間の欲望の臭いが充満しているものである。

堺も、むろん、例外ではない。

あらゆる階層の人間たちが、港周辺にこもる異文化の匂いと人間の消耗^{しょうもう}の臭いに魅せられるように群らがってくる。

京都、奈良、神戸、伏見、大坂など畿内^{きない}の商人はもちろんのこと、全国いたるところの商人たちが続々と市街にあふれる異国の商品を仕入れにやってくる。京都公卿も下向すれば、学者も歌人も僧侶も絵師も芸人も、全国の戦雲をのがれて、この黄金の都市へ殺到してきた。

天下大乱の高波を受けて主家が滅亡し、浪々の身となった武士たちが、野望抱懷の貌で先を争うように流れ込んでくる。

武士たちの目的は傭兵であつた。

幾度も戦禍の中心となりながら、巨億の商業資本を蓄積してきた泉州堺は、織田信長の畿内制圧に屈して、永禄十二年一月、遂に織田の直轄領とされるにいたつた。

が、直轄領とはなつたが、堺の自由貿易都市としての機能や経済力はいささかもそこなわれなかつた。

巨才織田信長は、堺を武力によつて抑圧しなかつた。堺に落ちる途方もない富を重視したのである。

天下制覇に向けて力強く前進していく織田信長は、西に毛利、東に武田、北条、北陸に上杉と戦線を拡張し、戦費は膨大になる一方であつた。

信長は黄金の力を熟知し、これを集め、使用する卓越した能力をそなえていた。

戦争は莫大な消費である。戦具をととのえるにも富、雑兵を募るにも富、輜重、糧食も富、将士を賞するにも富がいった。富はいかなる時代にも人間社会を支配する要素であり、とり分け、天下大乱の戦国時代は黄金がその威力を存分に発揮した時代であつた。

信長には富がいくらかでも要つた。堺はその富を信長に供与したのである。それゆえ、信長は戦線を拡大できたのだつた。

信長は戦国の世にあつて日本経済を活性化させるには、堺のような自由貿易港がいくつも必要

であると認識していたのである。信長の視線はこのときすでに波濤たぎりたつ大海原のかなたへそそがれていたにちがいない。

信長は堺を直轄領にしたというより、堺の大実業家、富裕な貿易企業と提携したのであった。納屋三十六人衆にあつて、巨大な財力を誇る巨大企業が二家あつた。

能登屋。

膳脂屋。

この二家を筆頭とした会合衆が、信長の代官と協議しながらも、事実上、堺という活気にあふれた自由貿易都市を取りしきつていた。

堺市街の材木町、中浜、甲斐町など主要地域には納屋三十六人衆の大店をはじめ、貿易商人たちの店々が三千軒もひしめいていた。

こうした大実業家から弱体商人にいたるまで、商家はほとんど傭兵を雇っていた。

傭兵は、戦国のならいで主家滅亡の憂目に遭った武士たちである。彼らは破れた夢をはるかな南海に馳せ、青雲の野心を抱いて堺に集まってくるのだった。

商人、武士、ならず者、無頼漢、悪党、信長の苛烈な残党狩りを逃れてまぎれこんできた浅井、朝倉等の残党が、迷路のごとき港界隈にひそみ、商船団の出帆を一日千秋のおもいで待っているのである。

むろん、売春窟もある。港新地は七千余人の娼婦が巢喰う一大売春地帯であつた。

堺という異文化の雰囲気にあふれた巨大都市は常に労働力を必要とし、傭兵を必要とし、全国

の商人たちが宿泊し、素姓のわからぬ人間たちでごったがえし、一大歓楽街という裏の貌をそなえている。それだけに、春をひさぐ娼婦たちの数も圧倒的に多かった。

堺港さかいみなとからやや距へだたった港新地にはさまざまな情感をたたえた遊廊りゆうどうが立錐りつすいの余地もなく建ち並び、海岸沿いには粗末な小屋がかぞえきれぬほどひしめいている。

大陸風の原色の彩色をほどこした竜宮のような遊廊には、武運つたなく敗者となった大名、豪族等の姫君、上臈、中臈、没落した公卿や名家の姫、武家の娘、その他不幸な宿業を担った深窓の令嬢たちが人買いの手によって諸国から連れてこられ、そうした哀れな女性たちが、客である商人どもの枕の塵ちりをはらっていた。

それにひきかえ、堺港から排出される塵、芥あぐた、ごみが波にもまれながら打ち寄せてくる海岸沿いのおびただしい売春窟は、文字通り地獄宿であった。

浅黒い皮膚に糲もみや糠ぬかや馬の臭いのしみついた土民の娘たちが、荒くれた船荷人足どもの性欲を充たしていた。ここまでおちこんできた土民の娘たちの運命は、どれもこれも、胸のつぶれるものばかりであろう。死ねばこもをかぶされて海に棄てられた。地獄宿の娼婦たちに人格はない。肉欲に猛たける船荷人足たちに昼夜を問わずからだを組み敷かれ、絶望のうちに死に、海の藻屑もくずになるのである。

一説には、友ヶ島水道の鯛がすこぶる美味なのは、潮に乗って流されてくる娼婦の亡骸むくろを食って肥ふとるからだといわれている。真偽のほどはたしかめようがない。

男と女の情交の臭いと分泌物の臭いのこもる巨大な売春窟を縫ぬいう迷路のような路地に、鶯鳥うぐいすの

衣紋に螺鈿を散らした小鞆巻をおび、鱗紋の陣羽織をはおった若侍の姿があった。路地にただよう宵闇に透ける顔は、思わず呼気をのむほど目鼻の冴えが美しかった。

追われているらしい。

匂いやかに前髪立ちを結びあげた細面の白面に、異様な緊迫感がみなぎっていた。深い睫毛にかこまれた張りのある二重瞼の瞳が凍ったようにきらめいている。

どこかの家を捜しているようでもあった。

紀伊水道から海鳴りが重くおおいかぶさるようにひびいてくる。

宵闇が目に見えて濃くよどんでいく。路地の両側に連なるひび割れた泥壁の内部から、それらしい息づかいやあえぎやうめき、含み笑いや嬌声が洩れてくる。

磯の匂いがつよい。

若侍の表情に思い詰めたような焦りがあった。

堺という巨大都市の腐肉捨て場のような売春窟には、さまざまな闇の業者たちがうごめいている。

水夫の幹旋業者、ヤミの両替屋、密航の手はずをつける者、よろず買い入れ商、阿片類をあつかう小悪党、その他港に關係したあらゆる闇業種が、この巨大な売春地帯の深みに潜んでいるのである。

世の裏側を徘徊する者どもは、売春窟にこもる臭気と似かよった体臭をしているのかもしれない。

路地から路地を足速やにすり抜けていく若侍の脚が、せきとめられるようにとまった。美しい顔が緊張をはらんだ。捜していたものに出会ったような表情である。

うすぐらい路地の突き当たりに、紫色の幟のぼりが立っていた。幟には両刃の宝剣に蛇くちなわが三巻き半からみついて鎌首かまくびをもたげている奇怪な図柄が白く染め抜かれてあった。

若侍の表情が鋭く引き締まった。奥歯を噛みしめた頬がこまかく震え、精いっぱいみひらいた。瞳に悲壮な決意がこもっていく。

しばしためらっていた若侍は、意を決したように奇怪な幟をたてた店に歩み寄っていった。店の前まで来ると、警戒するように後に視線を放ち、閉めきつてある遣戸やりとを開けてすばやく躰をすべり込ませた。

玄関先の帳場に燭台が点り、黄ばんだ光をぼんやりただよわせている。なんとなく怪しげな雰囲気である。陰謀めいた不穏な気配が奥のくらやみによどんでいた。

「倶利伽羅屋にどのような御用でございましょう」

帳場に座っている番頭らしき男が、丁重な口振りで尋ねた。三十二、三だろうか、表情はいかにもいんぎんだが、細く光る双眼はむごいことも平気でしそうな酷薄こくはくさをそなえていた。

「南条右京介と申す」

若侍が虚勢を張るように肩をそびやかした。

「主人に会いたい。案内をたのむ」

織細せんさいにとがった声が、かすかな震えをおびている。よほど緊張しているのだろう。

「唐突におっしやられましたも」

番頭は弱りましたなというように唇のはしに苦笑をにじませながら、若侍を舐めるように見つめた。

「甲斐町の竜昇堂に訊いてきた」

若侍がぶしつけな番頭の眼眸をはじきかえすように睨んだ。

「竜昇堂の小西如清様からでございますか」

番頭がおどろいたようにいった。が、腰をあげようとはしなかった。

「失礼ではございますが、なにか証になるようなものをお持ちでしょうか。この店には諸々の事情のあるお方がいらつしやいますので」

番頭が喉の奥でかすかな笑い声を立てた。細い双眼にからかうような表情がある。

「これを」

若侍は腰から金蔀絵の印籠をはずして、帳場の文机の上に挑むように置いた。

番頭はいぶかしげに印籠を取りあげた。無頼を隠したいんぎんな表情に、一瞬、異様な驚きが生じた。印籠には五七鬼桐の紋様がしるされていたのである。

「わかりましてございます」

番頭がおもねるような笑顔でそくさと腰を浮かした。

「どうぞおあがりくださいまし、失礼の段はひらにご容赦のほどを」と、小腰をかがめて若侍を奥へいざなっていた。